

2026 年日本経済学会春季大会企画セッション
日本学術会議経済学委員会数量的経済・政策分析分科会
チュートリアルセッション
応募者： 宇南山 卓（京都大学）

数理政治学への「再」招待：現状と実験室実験の可能性

浅古 泰史（早稲田大学）

<概要>

本企画セッションは、過去 15 年以上にわたり開催をしてきている、日本学術会議経済学委員会の数量的経済・政策分析分科会の提供するチュートリアルセッションである。数量的経済・政策分析分科会では、これまで日本経済学会の会員において関心が高いと思われるテーマを選定し、当該分野における第一線の研究者に依頼することで開催してきた。

本年は、経済学とその隣接分野である政治学を横断する研究を行っている早稲田大学の浅古泰史先生をお招きする予定である。数理政治学の近年の動向についてレクチャーと質疑応答をいただく予定である。

数理政治学（ゲーム理論を中心とした政治の数理分析）が経済学と政治学の中で大きく受容されてから、20 年以上が過ぎている。経済学では一定程度の研究が引き続き行われている一方で、政治学での受容のされ方は変容してきたと言って良い。近年では、一部の政治学における総合一流誌で関連分野の研究の掲載率が大幅に下がってきている。その背景を検討しつつ、今後の数理政治学が担う役割を議論する。

その中で、政治的分極化や誤情報の拡散が生じる背景を、数理モデルを用いて分析したうえで、その含意の妥当性を、実験室実験を通して検証した発表者自身の研究を含めて多面的に紹介をする。そのうえで、数理政治学分野と実験室実験の今後の可能性を検討する。

このセッションの登壇者は浅古教授のみを想定しており、1 時間半もしくは 2 時間のセッションを予定している。時間については、セッションの配置に応じ調整可能である。基本的にレクチャー方式を進めるため、通常の学会発表と同様の設備等で対応が可能である。また、会場の状況に応じて、Q&A セッションも開催し、日本経済学会の会員の研究活動に資するように配慮する。